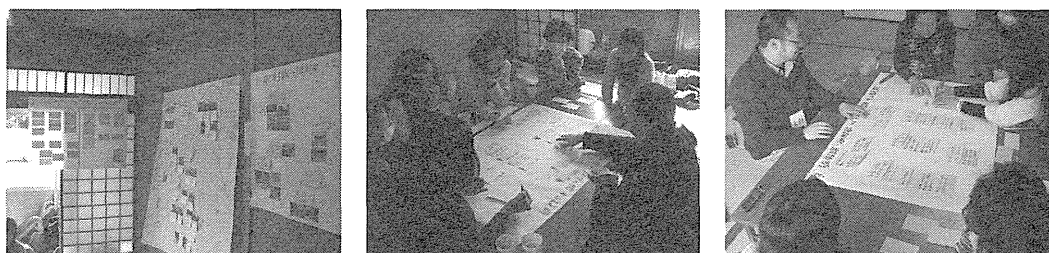


- 私有地、空き地などは今まで気にならなかった。身の回りにないので、視界（意識）に入っていなかった。

放射線・放射能のリスクに関する疑問の整理

これまでの話し合いを基に、放射線・放射能のリスクに関する疑問を附箋に書き出し、疑問をグルーピングし、代表疑問を作成した。その後、代表疑問に優先順位をつけた（図12）（模造紙3）。



- ①マップや今までの模造紙 ②疑問をグルーピングし、 ③代表疑問の優先順位を決
を見ながら疑問を書き出す 代表疑問を作る める

図12 放射線・放射能のリスクに関する疑問の整理

代表疑問、および、それに属する疑問を以下に整理した。数字は優先順位である（③は同率で2つある）。

①現状

- 雨水のたまる所（側溝、下水溝）は、どの程度放射線量が高いのか？
- 枯れ草の放射線量はどうなっているのか？
- コンクリートに染み込んだ後の放射線量はどうなっているのか？
- 水道の水（学校、公園）は安全なのか？

②除染後の安全

- 除染後の学校や公園は本当に安全か？
- 除染した後でも雨水が流れ込むような低い場所はどうするのか？

③今後の対応をどうしていくのか？

- 除染していない所は今後どうなるのか？
- 私有地に関して何かできる方法はないか？

- 私有地他の除染はどうなっているのか？
- 今後、私有地の除染を行う予定はあるのか？

③除染しなかった時の安全

- 除染を行わない私有地などは、何十年くらい経てば放射線がなくなるのか？

④情報公開

- 最も気をつけるポイント・場所はどこか？
- 除染が終わっている場所を分かりやすく表示してもらえないか？

⑤廃棄物

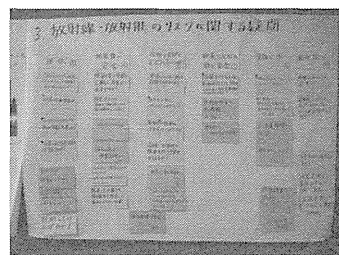
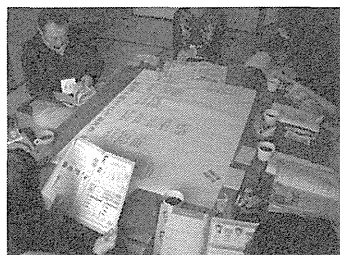
- 除染した後の土、木、草はどうするのか？
- 廃棄物がどんどん増えていくが、それをどうしていくのか？

(その他) 自宅周辺の除染方法、費用⁴

- 自宅周辺の除染方法は？ また、費用はどうなっているのか？

4) グループワーク (疑問の答えを見つける)

代表疑問に対し、「放射線便利帳」など⁵のパンフレットを各自が読み、答えを探した。その後、各自が答えだと思われる文章を附箋に書き、1人ずつ発表して、答えをまとめていった。解決したと思う疑問には青いシールを貼っていった。疑問が派生した場合は、運営スタッフが附箋に書き出した。(図13)(模造紙3)。



①パンフレットを読み、答 ②答えだと思われる文章を ③答えをまとめ、納得でき

⁴ この質問については、グループワークの中で参加者間での意見交換がなされ、解決の糸口に至ったため、優先順位からは除いた。

⁵ その他に用いたパンフレットは、「子どもと未来のために ～放射線の基本と対策～ (柏市)」 「調べてなっとくノート ホウシャ線ってなんだろう！？ (環境省)」 「中学生・高校生のための放射線副読本 (文部科学省)」

えを探す

書き出し、発表する

た疑問には青シールを貼る

図 1 3 疑問の答えを見つける

以下に参加者が見つけた答えをまとめた。

①現状【解決：自分で放射線量を測らなければいけないということが分かった】

- 「子どもと未来のために ～放射線の基本と対策～（以下、柏市パンフレット）」の 14 ページに、継続が大切である、測定器を貸し出している、との記述あり。
- 「柏市パンフレット」の 8 ページを読み、コンクリートに染み込んでいる放射性物質の量は少ないということが分かった。

②除染後の安全【未解決：人によって考え方が違う。除染したといっても不安が残る】

- 「柏市パンフレット」の 3 ページに、市は $0.23 \mu\text{Sv/h}$ 以下を目標に除染を進めている、という記載がある。
 - 「柏市パンフレット」の 13 ページに、柏市に合った除染方法を考える必要がある、と書かれている。
- （新たな疑問）「柏市パンフレット」の 18 ページの記述を読んで、自宅の雨水枡がどうなっているかが気になった。
- （新たな疑問）除染をしたといっても、植込みなどまで除染しているかどうか、不安が残る。

③私有地の今後の対応【未解決：方法は分かったけれども、実際はどうなのか分からない】

- 市の職員に依頼するなど、方法はあるようだ。
- 「柏市パンフレット」の 20 ページに、生活道路は除染についての記載があった。まだ除染は行われていないようなので、今後気をつけなければならないし、町会単位で動く必要があるだろう。

③除染しなかった場合の安全【解決：半減期があり、自然になくなるには時間がかかること、安全ではないことが分かった】

- 「柏市パンフレット」の 6 ページ、27 ページに放射性物質の物理学的半減期の記述あり。

④情報公開【解決：公開していることが分かった】

- 「柏市パンフレット」の20ページに、生活道路で線量が高い場所が載っていた。
- 柏市のホームページに情報が載っているようだ。

⑤廃棄物【未解決】

- パンフレットに廃棄物の処分方法は書いてあったが、廃棄物がどんどん増えていくことについての疑問は解消しなかった。

(その他) 自宅周辺の除染方法、費用

- 「柏市パンフレット」の16ページに、除染作業の流れが書かれている(自分でやる方法)。
- 「柏市パンフレット」の19ページに、除染活動支援などの記載あり。

5) インタビュー (パンフレットについて)

※「当該研究における成果物の有効性に関する評価(フォーカスグループインタビュー)」に該当

参加者が放射線便利帳、柏市パンフレットの良かった点、悪かった点を付箋に書きだし、1人ずつ発表した(模造紙4)。(「放射線便利帳」に関する内容については、成果物の有効性に関する評価を参照。)

[柏市のパンフレット]

良かった点

- 柏市に合った除染方法を知ることができた。
- 柏市独自の考え・基準・対策が書かれていたのが良かった。具体的な問題が書いてあった。
- 除染について詳しく載っていることが良かった。
- 7~8ページの図(一戸建ての周辺で放射性物質がたまりやすい場所)が分かりやすかった。

悪かった点

- 7~8ページの図のマンション版もあると良かった。
- 解決できていない問題(例えば、除染の予定がない公園もある、など)があるはずなのに、それが記載されていないし、まるで除染をしているかのように書いてある。していないなら、していないと書いてほしい。除染しない理由も明らかにしてほしい。
- このパンフレットはいいものだけでも、今まで手元に届かなかった。町会に入って

いないと、町会からの情報も来ない。

6) 振り返り（アンケート記入と発表）

※「PhotoVoice 手法の有効性に関する評価」に該当

参加者が、本日のワークショップについてのアンケートに記入した。その後、1人ずつ、ワークショップでの発見や気づきを発表した。なお、アンケートは付録 C に、内容は本節（3）に示す。

7) インタビュー（ワークショップについて）

※「PhotoVoice 手法の有効性に関する評価」に該当

参加者が、記入したアンケートを基に、ワークショップの良かった点、悪かった点を付箋に書き出し、1人ずつ発表した。悪かった点については、改善提案も伺った。なお、内容は本節（4）に示す。

（3）ワークショップの有効性に関する評価

6) 振り返りにおいてアンケートに記入、もしくは、発表したことを基に整理する。

ワークショップを通して、忘れかけていた放射線のリスクについて考えるきっかけになったとの意見が見られた。問題の再認識することによって不安になることはないかをたずねたところ、リスクがわかっていたほうが良いとの意見を得た。

また、人と共通の不安を持っていること（皆が子どもたちが行くところ、遊ぶところを心配していること）と、人によって相違点があること（人によって気になるポイントやものが異なること）に気づいたという意見が多く見られた。

さらに、話し合うことによって、不安なことが思ったよりも簡単に解決できることもあることを認識したとの意見も見られた。

フォトボイス手法の有効性としては、写真を撮るという行為自体によるリスクの再発見の効果、写真や地図、付箋を用いることによる視覚的に訴える効果を指摘している。

以上より、今回提案したフォトボイス手法を用いたワークショップは、放射能・放射線リスクの発見（再確認）に有効であること、視覚的な手法であることから情報共有（見える化）も容易であることがわかった。また、見える化が容易なことから、他の人との考え方の共通点や相違点を知ることができ、さらに、不安の軽減や解決への糸口にたどり着くことも、進め方によっては可能であることがわかった。

なお、ワークショップが楽しく進められたという意見も聞かれたことを補足しておく。

以下は、アンケートやグループワークで示された論点。

[発見や気づき]

- 最近少し忘れかけていた放射線について、考えるきっかけになった。
- 大変心配していた時期があったが、「もう大丈夫だろう」と判断した時から、考えることも情報を収集することも全くなくなっていた。問題が解決したわけではないので、これからも状況がどのように変化していくか見守りたいと思った。
 - 解決していない問題とは何か？・・・柏市の基準は $0.23 \mu\text{Sv/h}$ だそうだが、植込みなどはまだその値になっていないと思う。自分が気にしなくなっただけで、問題はまだあるのだと思った。
 - 今日のワークショップによって、問題を再認識したことになるが、それは良いことなのか？・・・良いことだと思う。知らないより、分かっていたほうが、精神衛生上良いと思う。
- 人による気になる場所が違う（多い）ことが分かった。
- 今まで気にしていなかった（以前は気にしたけど、忘れていた、または改善した）ことをよく考えるきっかけになった。人により気になる場所が違う（多い、少ない）ことが分かった。例えば、苔を気にしている人がいた。
 - いつ、人によって違うと気づいたか？・・・人によって写真の枚数が違う＝気になる場所の量が違う。自分は下水溝くらいしか気にならなかったが、他にもいろいろあるということが分かった。／写真を貼っていく作業のときに、さかんに「苔が、苔が」と言っているのを聞いて気づいた。
- 事故当初は講演会やセミナー、パソコンで自分で情報収集をし、自ら気をつけていたが、4年近く経ち、時間とともに意識が風化しているのを感じながら写真を撮った。撮った写真を子供たちと一緒に見て、その写真のどこが安全でないかを子供たちが認識していたことに驚いた（震災当時に子供たちにいろいろと言っていたことを、子供たちは覚えていた）。当時子供たちがどんな気持ちでいたのか心配になった。
- 放射能について、あまり深く考えていなかったが、子供の安全を改めて真剣に考えることができた。

[印象に残ったこと]

- みんな、子供が行く所、遊ぶ所を心配していることが分かった。
- 今まで友達とこういう話をしたことがなかった。皆も同じように気にしていることが分かって安心した。私が一番神経質であることも感じたが、友達も同じように感じていたのだと分かったのが印象的だった。
- 人によって気づくことが違うので、自分の行動範囲外のことも考えられて良かった。

- 不安なことも、話し合ってみることで簡単に解決方法が分かることがあった。個人により不安の度合いが違うことを再認識した。
- 写真、地図、付箋を使うことで、文字だけでなく視覚的に訴えるものが多く、混乱しなかった。興味深かった。

[全体としての感想]

- 改めて考え、考え直す機会が与えられたのが有効的だった。写真を撮り、地図上に貼ることで、問題や疑問点なども話しやすかった。
- 改めて、放射能について考えることが出来た。もっと多くの人に話を伝えたい。
- 他人と問題を共有したり、解決方法を探すのが楽しかった。
- ワークショップの流れ（手順）がちゃんとできているので、解決策を見つけやすかった。
- 初めての経験でドキドキしたが、勉強になった。ありがとうございました。
- 柏市がホットスポットだと情報を得て、たくさん講座を受けたが、不安はなくならなかった。放射線に関する安全かどうかの基準が明確でないため、不安はなくならないと思っていたが、この手法であれば、不安を軽減できると思った。

(4) ワークショップの進行に関する評価

6) 振り返りにおいてアンケートに記入、もしくは、発表したことを基に整理する。

参加者の選定について、同じ年代、同世代の子どもを持つ知り合いをグループとしたため、話しやすく、いろいろな意見が出たり、共通点が分かりやすかったという意見が多く見られた。一方、他の世代ともやってみたいとの意見もあった。

また、疑問点を整理しておいてから、改めて解答を探すというステップが、資料を見るにしても、調べやすく良いとの意見もあった。一方、今回のワークショップでは、解答を探す資料として、パンフレットのみを用意したので、そこに書いていないことについては知ることが出来ないとの指摘もあった。これについては、専門家を配置すること等で対応することが必要であると思われる。

付箋を用いて、意見を書き、見える化していくことも好評であった。

運営に関しては、総じて高い評価を得られた。参考までに、運営内部で準備した資料を付録Dに示す。

以下は、アンケートやグループワークで示された論点。

[リスクマップ作成、疑問点の整理]

良かった点

- 同じ年代で同じ子供を持つ 5 人でワークショップを行ったので共通点が分かり良かった。
- 同じ世代、同じ子を持つグループで行ったので、共通点がより分かった。
- 同じ地域だけれど、自宅周辺が全く重ならなかったので、行動範囲外のことも知れて良かった。
- 知っている者同士なので、いろいろ意見が出せた。
- 思いもよらなかった問題、疑問点が出てきた。
- 何人かいるといろいろな違う意見があって良かった。
- 忘れていた危険な場所も発見できた。
- 写真を使うことで、より具体的に各自の気になる場所を知ることができた。
- 目に見える形で、問題の場所やことが分かったので良かった。
- 柏全体のことを考えられた。
- 質問されることがちゃんと順番になっていて考えやすいし、答えやすかった。
- 何が不安なのか、何が問題なのか非常に明確になった。

悪かった点 (⇒は改善提案)

- 違った年代の人と行えば、また違った視点で考えも出てきたのかもしれない。
⇒いろいろな年代の人を呼ぶ (例えば、若い世代 3 人、お年寄り世代 3 人など)。
⇒地域の元気なお年寄りの方に、子育て世代の不安を理解していただければ、地域全体で協力して活動できるかもしれない (お年寄りの方には、子供を持つ世代の気持ち理解しにくいかもしれない)。
- みんなで話し合っているうちに、他人の意見に左右されることもあるのではないか。
- 地図の上に載らないものが話題になりにくかった。

[パンフレットを用いた答え探し]

良かった点

- 今からでも出来ることがあることが分かった。
- 4年経った今だから、今後の対応として考えることができたと思う。
- 自分で解決できることも多いことに気づいた。
- 新しい問題点の発見もできた。
- 午前中の作業で問題がはっきり分かっていたので、調べやすかった。
- 今まで、疑問に思っても、答えを探すということをしなかったが、いくつかの答えが

見つかったので良かった。

- 問題点、疑問点について、解決策まで自分たちで主体的に考えられた。

悪かった点（⇒は改善提案）

- 事故当初にこういう機会や環境があれば良かったと思った。
- パンフレットに載っていないことは分からなかった。
⇒専門家呼び、フォローしてもらおうという方法もある。
⇒事故当初は、「対策は今後検討します」という回答が多かった。今だからこそ、ちゃんと今後の対策を教えてほしい。

[進め方について]

- 口頭で話すよりも、付箋に書いて、貼っていくやり方がとても良かった。口頭だけだと途中で忘れてしまうことがある。
- タイムスケジュール通りに進むのは慌ただしかったけれど、順序良く進めていただいたので、とても良かった。
- 進め方はとても良かった。何を聞かれているかよく分かり、答えやすかった。
- 段取りよくスムーズに進めていただいて良かった。今、取り組んでいる1つ1つのことを自然に流れに乗せていただき、その中で、自分でも思わなかったことにたくさん気づくことができた。
- とても分かりやすく、またいろいろな問題を考えさせられた。

(6) まとめ

PhotoVoice 手法の有効性に関する評価では、フォトボイス手法を参考にして、放射能・放射線リスクの発見やその解決の糸口の解決に結びつける取り組み（ワークショップ）を提案・試行した。

具体的には、参加者にあらかじめ気になるポイントの写真を撮ってもらう。ワークショップ当日には、写真を地図上に配置したり、写真をグループ化したりすることによって、放射能や放射線のリスクに関する疑問を発見する。この疑問に対して、パンフレットを用いて、自ら答えを探す試みをする、というのがワークショップの概要である。

ワークショップを通して、忘れかけていた放射線のリスクについて考えるきっかけになったとの意見が見られた。また、人と共通の不安を持っていることと、人によって相違点があることに気づいたという意見が多く見られた。さらに、話し合うことによって、不安なことが思ったよりも簡単に解決できることもあることを認識したとの意見も見られた。

フォトボイス手法の有効性としては、写真を撮るという行為自体によるリスクの再発見の効果、写真や地図、付箋を用いることによる視覚的に訴える効果を指摘された。

試行したフォトボイス手法を用いたワークショップは、放射能・放射線リスクの発見（再確認）に有効であること、視覚的な手法であることから情報共有（見える化）も容易であることがわかった。また、見える化が容易なことから、他の人との考え方の共通点や相違点を知ることができ、さらに、不安の軽減や解決への糸口にたどり着くことも、進め方によっては可能であることがわかった。

したがって、福島における展開可能性としては、フォトボイス手法を用いることで、具体的な形でリスクを認識、共有し、その解決に向けて話し合う価値のある場面であり、かつ、共通の地理感覚とリスク感覚を持っている人たちの間で行われることが望ましい。

例えば、ある保育所において、職員複数名を参加者として、子どもたちの活動範囲におけるリスクの確認と、対応策の話し合いをするための材料を提供するという試みには応用価値があるだろうと思われる。この場合、共通の地理感覚（保育所周辺の散歩コースなどの範囲内）を持ち、共通のリスク感覚（子どもたちへの影響に対するリスク感覚）を持っている。また、抽象的な話よりも、具体的な対象について、どう対応するかを真剣に知ろうとする意識も強い。

全般として、フォトボイス手法は、視覚的に訴えることが可能であり、適切な見える化をすることによって、気づきを誘起できる手法であると言える。福島の放射能・放射線リスクに関するマネジメントやコミュニケーションの場面へも、幅広い応用が期待できると言えるだろう。

（5）福島における展開可能性について

以上の分析により、フォトボイス手法を用いることによって、写真を撮るという行為自体によるリスクの再発見の効果、写真や地図、付箋を用いることによる視覚的に訴える効果を指摘することができる。

今回のワークショップは、総じて参加者から高い評価を得ることができたが、その理由を挙げると、以下のようなになるだろう。

- 忘れかけていた放射線のリスクについて考えるきっかけになった、リスクの再認識ができたこと。リスクを認識することは、うやむやになっている状態よりも良い。
- 自分と人との共通点や相違点を知ることができること。
- 話し合うことで、不安なことが思ったよりも簡単に解決できることもあること。不安の軽減にも一定の効果がありそうなこと。

また、その環境要因を整理すると、以下のようになる。

- 柏市は、震災後に放射能・放射線リスクが大きな話題となったが、現時点でかなり放射線リスクが低くなっている。現在では、心配している住民があまり多くない。(少なくとも参加者はそうであった。)
- 参加者は、同世代の子育てをしている母親で、知り合い同士。子どもという共有のリスク感覚を持っている。また、住んでいる地域もそれほど遠くなく、お互いに住んでいる地域の地理に疎くない。

福島における展開可能性としては、フォトボイス手法を用いることで、具体的な形でリスクを認識、共有し、その解決に向けて話し合う価値のある場面であり、かつ、共通の地理感覚とリスク感覚を持っている人たちの間で行われることが望ましい。

例えば、ある保育所において、職員複数名を参加者として、子どもたちの活動範囲におけるリスクの確認と、対応策の話し合いをするための材料を提供するという試みには応用価値があるだろうと思われる。この場合、共通の地理感覚（保育所周辺の散歩コースなどの範囲内）を持ち、共通のリスク感覚（子どもたちへの影響に対するリスク感覚）を持っている。また、抽象的な話よりも、具体的な対象について、どう対応するかを真剣に知ろうとする意識も強い。

今回のワークショップでは、答え探しのステップでは「パンフレット」を用いて、自ら答えを探した。しかし、福島では、積極的に情報を提供できる専門家の協力が不可欠であろう。なぜなら、福島において、放射能・放射線リスクは「現在進行形」のものであり、答え探しに関しても、中途半端では許されないからである。参加者に対して、適切な支援をできる専門家が必要であろう。1節でも述べたが、放射線リスクに関するような、単純な科学技術だけでは解決しない問題を取り扱う場合には、専門家の分野も広く取っておく必要がある。リスクの波及範囲を整理して、それをカバーできるような人選が好ましい。また、地域の事情に通じている（ローカルナレッジの豊富な）専門家も用意する必要がある。

全般として、フォトボイス手法は、視覚的に訴えることが可能であり、適切な見える化をすることによって、気づきを誘起できる手法であると言える。福島の放射能・放射線リスクに関するマネジメントやコミュニケーションの場面へも、幅広い応用が期待できると言えるだろう。

放射線

保健福祉
職員向け

Q&A

便利帳

原子力災害からの回復のために

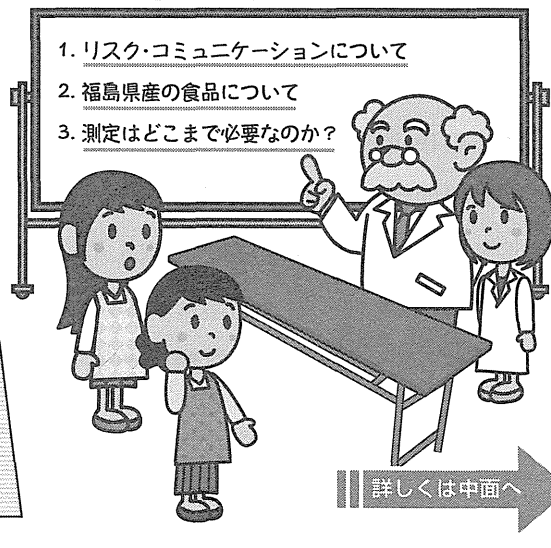
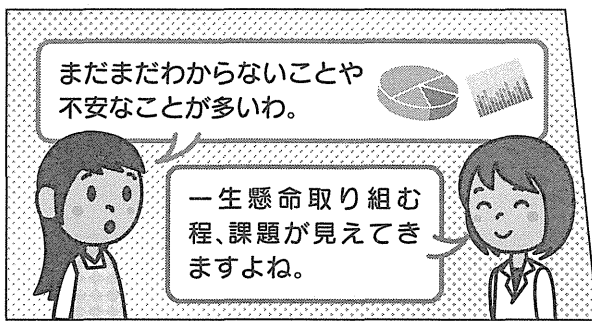
Y
Nishimura
編

現場での
取り組みを
考えよう!

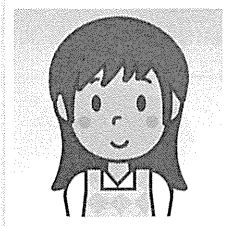


国立保健医療科学院

便利帳ステップアップ編の使い方

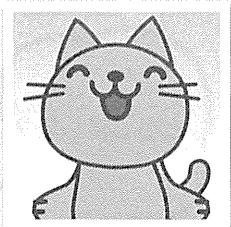


登場人物紹介



エミ先生

保育士。
放射線の疑問を
にゃん太くんや
アオイさんに
質問をするよ。



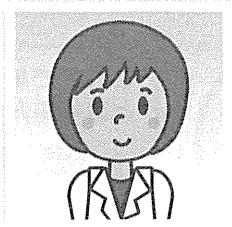
にゃん太くん

放射線の疑問に
答えるよ。



シゲじい

放射線の専門家。
地域の皆さんを
サポートするよ。



アオイさん

保健師。
にゃん太くんを
サポートするよ。



カスコさん

保育園に通う
子供のお母さん。

概要

この冊子は、保健福祉職員のための放射線便利帳のステップアップ編として作成しました。放射線便利帳同様に、平成24年度の福島県でのリハーサル研修会、平成25、26年度福島県保健福祉部子育て支援課主催の「ふくしま保育元気アップ緊急支援事業相談支援者育成研修会」に参加された福島県内の保育士の方々や地方自治体の方々、NPOで活動なさっているの方々など現場で頑張っておられる様々な方々から力を頂き作成しています。

放射線便利帳と同様に、原子力災害後の対応で課題となるコミュニケーションの問題を取り上げています。

研修に参加された保育士の方々、準備下さった福島県の方々、協力下さった福島県立医大（放射線医学県民健康管理センター、放射線健康管理学講座、災害こころの医学講座、公衆衛生学講座、放射線医学講座）の方々、国立精神神経センターの金吉晴先生、長崎大学の堀口逸子先生、除染情報プラザの方々、市民科学研究室の上田昌文さん、福島県医師会小児科医会の市川陽子先生、菊池信太郎先生、国立成育医療研究センターの原田正平先生、福島県作業療法士会の岡本宏二先生、臨床心理士の成井香苗先生、ユーモアで専門家と会場の橋渡しをしていただいた半谷輝己さんに感謝申し上げます。

また、フォローアップ研修に参加いただいた日本放射線安全管理学会の皆様や研修会を傍聴して下さった皆様、研修の準備をサポート下さった本院のスタッフにも感謝申し上げます。

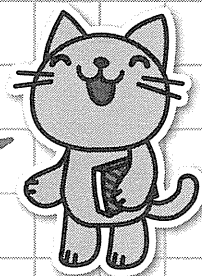
国立保健医療科学院 山口 一郎

リスク・コミュニケーション



放射線の事について、行政の方や保護者の方々と話す機会が増えたけど、コミュニケーションって難しいわね…
立場や環境が違ると、考え方も違うのかしら？

相手のことが理解できていないと「共感」できないし、相手から
想いが伝わらないと思われてしまうから、コミュニケーション
が難しいと感じるよね！
「リスク・コミュニケーション」って聞いたことがあるかな？



リスク・コミュニケーションとは？

1つの結論を導き出すものではなく、正解のない問題を考え合うことです。
専門家の決定を受け入れさせることでもありません。
リスクの対応には、個人レベルと社会レベルがあります。

この『ステップアップ編』でのリスク・コミュニケーションの定義は、リスクについての個人、機関、集団間での情報や意見のやりとりの相互作用的過程（お互いに影響を及ぼし合いながら建設的に継続すること）の事をいいます。(National Research Council, 1989)

個人レベル

**どう行動するかは
個人の判断に委ねられています。**

メッセージの送り手は、個人が求める
リスク回避ができるように情報提供
します。受け手はその情報が理解でき
たかをフィードバックしたり、欲しい
情報を自ら取りに行きます。

社会レベル

**社会的な課題を社会として
解決する必要があります。**

リスクへの対策を社会で行うために、
各人それぞれが求められる役割を果
たし、対話・共考・協働を実践して課題
解決を図っていくことです。

リスク・コミュニケーションで何をを目指すのか？



「個人レベル」では個人がそれぞれ判断し、「社会レベル」では合意を得
て課題解決を図る必要があるね。

リスクは単純に減らすことができず、分け合うしかないから、「リスク
が公平に配分されたと思えること」や「必要な情報を知ることができ
たと満足できる」ように、コミュニケーションを良くして、日頃から意
見交換したり、情報を共有したりすることが大事だね。



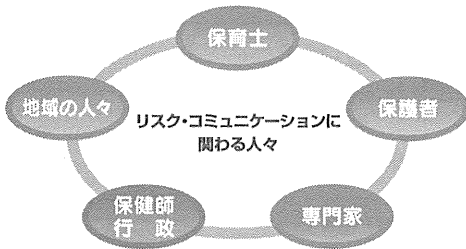
なるほど！考え方や結論を一つに絞ることではないのね。でも、どのように行えばよいのかしら？



立場によって事情がそれぞれありますね。



リスク・コミュニケーションでのあなたの役割はどんなことがあるのかな？

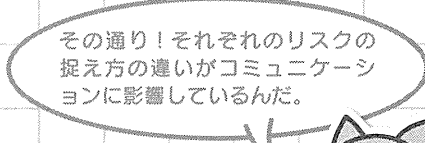


役割を果たすために大事なこと

- ① **協働が重要**
※協働とは…複数の主体が同じ目的(目標)のために対等の立場で協力し合っ
て活動することです。
- ② **コミュニケーション技術の向上**
例えば、相手を否定的に評価する表現を避ける方法などがあります。
- ③ **相手のことを知る**
相手の立場や状況を理解しましょう。常々のコミュニケーションが大切です。
- ④ **取り組み方を考える**
目的(目標)を達成するために何をすべきか、協働してできることはありませんか？



立場や条件が変われば、リスクの捉え方や考え方も違うわよね。






その通り！それぞれのリスクの捉え方の違いがコミュニケーションに影響しているんだ。

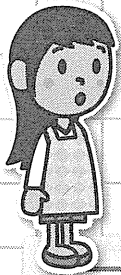
リスクの捉え方の違いとは？

ある人にとって小さいリスクを別の人が大きく捉えるのも感じ方の違いです。リスクをどのように捉えるかは、立場によって異なることがあれば、立場が同じでも、地域によっても違うことがあります。保育所で保護者がスタッフかで異なることがあるだけでなく、同じ園長という立場でも考え方が同じだとは限りません。

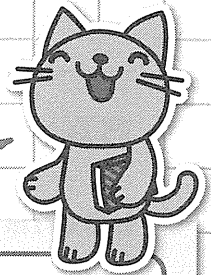
例えば… 牛乳を例にあげると…

客観的	捉え方の違い	主観的
 <ul style="list-style-type: none"> ○食品からの被ばく線量の上限は年間1mSvに引き下げられました。 ○牛乳の放射性セシウムの基準値は50ベクレル/kgです。 ○これは安全(リスクが小さい)に飲むことのできるレベルです。 		<ul style="list-style-type: none"> ○子どもが口にするものはより安全なものがいいわ。 ○少しでも放射性物質を含むものは気持ちが悪いから、子どもには与えられない。 

上記の例のように、情報発信側は科学的なデータ(限界もあります)等を用い「今では、牛乳もリスクが小さく安全」(客観的)としても、情報受信側は「子どもの事を考えると気持ちとして受け入れ難い」(主観的)と感ずます。ここにリスクの捉え方の違いがあります。



保育所でリスク・コミュニケーションができるのかしら？



日頃のコミュニケーションが大切だよ。

コミュニケーションとは？

コミュニケーションは表情や言葉などを通じて情報(意思・感情・思考等)を伝え合い、その意味を共有し合うことをいいます。

日々のコミュニケーションに置き換えると…



保育施設のような情報を提供する側と情報を受ける側の関係の場合には、日頃のコミュニケーションのあり方を考えることになるよ。

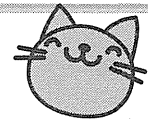


リスク・コミュニケーションを行うには、利害関係者が揃う必要があるから、保育所で行うことには限界があるよ。

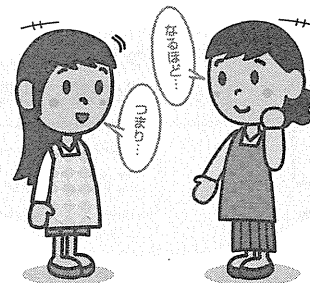
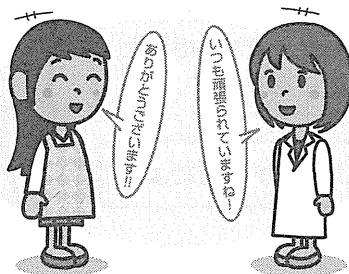
保育士の役割を考えると、コミュニケーションが不足している家庭があれば、家族で話をすることを促すことが考えられるよ。



保育所の保護者会も、大切なコミュニケーションの場。難しい問題を扱うときには、お互いの理解を深める必要があるね。

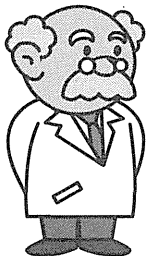
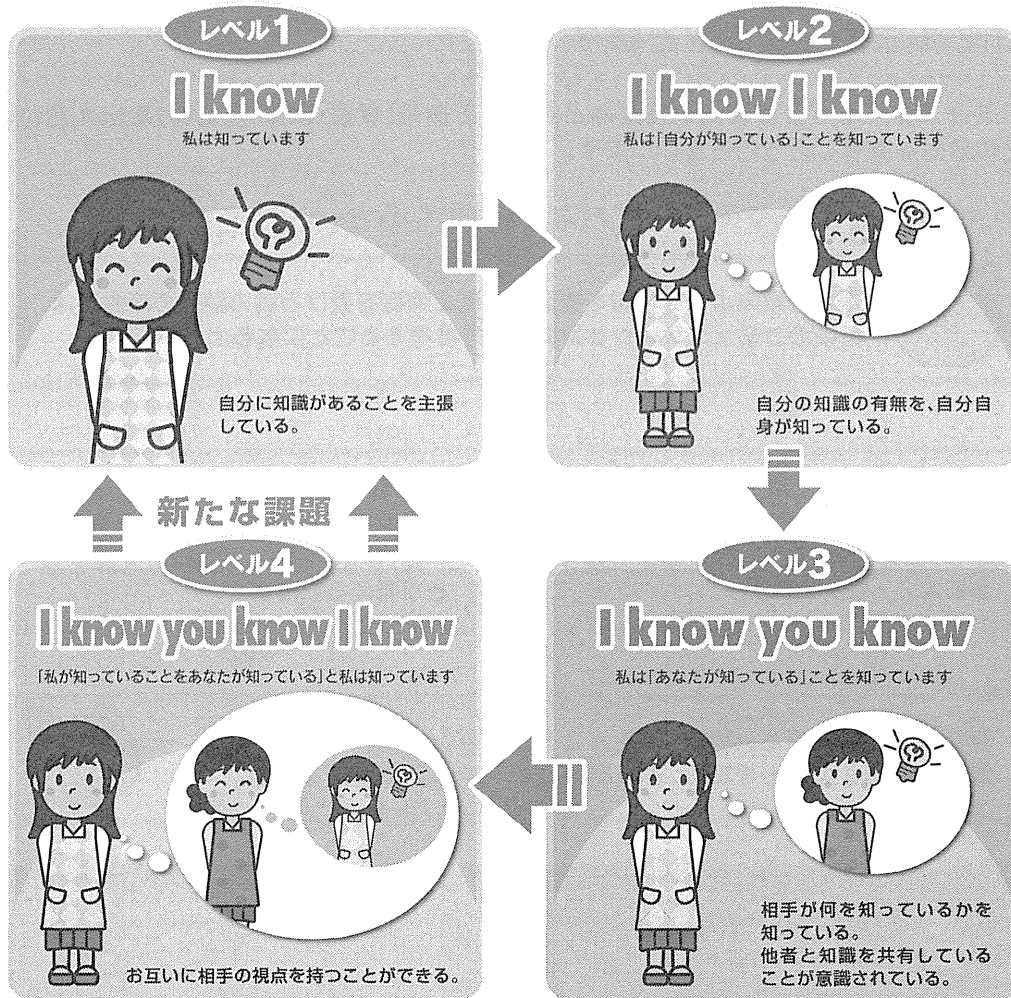


問題をどう解決していくかを考えるときに、保育所だけに責任を押し付けるのは適切ではないでしょう。何をどうしていくかの責任は「みんなにある」と考えることができるとよいのではないのでしょうか。



お互いの理解を認知する 4ステップ

Lewis(2003)の認知発達の4段階(Theory of Mind)



レベル4だと、自分が何を知っていて、他者が何を知っているのかを相互にチェックでき、相手との知識の違いも理解できることになります。

このレベルを目指すプロセスが大切だよ。



(出典)『厚生労働科学研究費補助金(平成21～23年度)「健康危機管理従事者のリスク/クライシス・コミュニケーションスキル向上のための研修プログラムの開発と評価」班 研究代表者 吉川 肇子(慶應義塾大学)』

課題と解決案



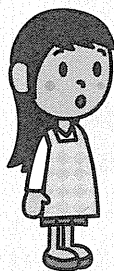
これまでたくさんの事に取り組んできたけれど、まだまだ課題があると思うわ…。

どの取り組み方が正解というわけではないのです。しかし、皆さんのこれまでの取り組みは決して無駄なことではありません。正解がないので、たくさん悩むこともあると思います。課題となっていることを一緒に考えていきましょう！



Case 1

散歩はどうなの？



子どもたちを外で遊ばせたいので、園庭の土を入れ替えたり、園舎の除染をしたのだけれど、園の周辺ではまだ除染作業が進んでいない場所もあるわ。どうしたらいいのかしら？

どのようなことに不安を持っていますか？

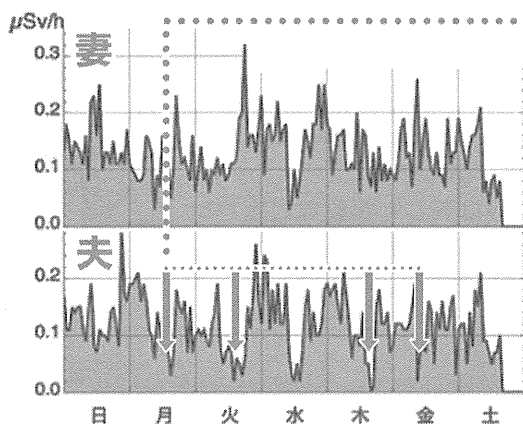
安全の基準を明確にして欲しいわ。

原子力災害からの回復期には、1年間で1~20ミリシーベルトの範囲で下方を部分目指して対応するべきとされています。データを見てみましょう。



線量率を詳しく(1時間毎に)測った例

(出典)早野龍五、宮崎 真 福島の内外部被ばくと外部被ばく
～測って伝える個人線量～、FBNews No.447,2014より



平日の昼間ご主人の線量は低い
(勤務先の線量が自宅より低い)

郡山市のM家夫妻の個人線量計測定
結果だよ。(水曜の昼は仙台市に滞在)



線量率は生活と関連するのね。

詳しく知りたい場合は、自分の行動
と線量の関係が調べられます。



線量計を付けてもらい各地域で測った例

(出典)野中俊吉、D-シタトルによる全国放射線量比較調査について、
FBNews No.457, 2015より

都道府県	被ばく線量 (マイクロシーベルト/週)	屋外滞在時間 (h)	人 数	都道府県	被ばく線量 (マイクロシーベルト/週)	屋外滞在時間 (h)	人 数
富山	10-17	15-35	9	千葉	10-13	15-25	3
福島	12-21	2-34	12	東京	11-18	20-24	3
三重	9-15	7-49	10	奈良	10-17	17-41	10
広島	10-17	12-37	10	青森	8-11	6-33	10
高知	10-16	7-39	9	大分	9-15	12-22	10
埼玉	10	7-26	4	北海道	7-12	7-35	9

※測定期間は1週間 ※20マイクロシーベルト/週≒1ミリシーベルト/年

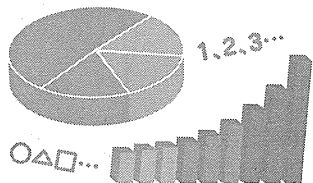
地域間で違うだけではなく
地域内でも異なるのですね。

目標とするレベルと比較することが
できます。

解決案
-1-

現状が把握できて
いますか？

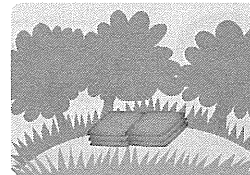
例えば…散歩の安全性やリス
クを、NPOや除染情
報プラザ、大学等に
説明してもらう。



解決案
-2-

できる工夫はありそうですか？

例えば…散歩コースや休憩場所を変え
る、放射性物質がたまっている
ところに土嚢を置いて空間線
量を減らす。



解決案
-3-

スタッフや保護者の理解を得られるよう
コミュニケーションできていますか？

例えば…懇談会等のコミュニケーションの場を
設ける、広報誌等の配布物を定期的に
保護者へ配布する。

